

がんの
教室

田中 伸哉 ④

がんの細胞をキャク
ターにするとどうなるだ
ろう。

私が専門としている病理学の役割は、臨床医が患者から採取した細胞の塊を顕微鏡で見て、悪性かどうか、つまりがんかどうかを診断することだ。5ミリの臓器の一部を顕微鏡にセットして200倍に拡大し、目をこ

悪性細胞の顔つきは

胃でも大腸でも乳腺でも、ヒトの正常な細胞はきれいだ。個々の大きさがそろっていて、規則正しく整列しているからそ

しかし中には見分けにくいものもある。正常な細胞に見えても、微妙に形がいびつだったり、核の色がやや黒ずんでいるということがあつた。がん

と診断していいのか、そうではないのか、難しい判断を迫られる。将来ギヤングに成長して悪さをする予備軍なのか、ちょっと荒っぽうだが害の

ないチヨイ悪なのかを見
分けるようなものだ。

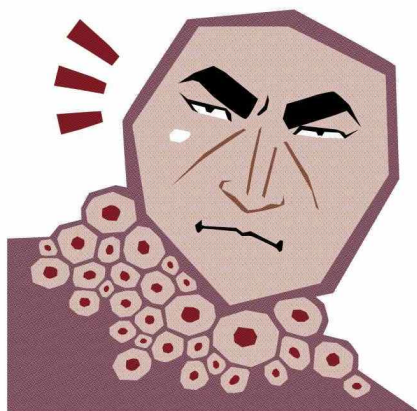
がんならば早期治療につながるが、がんでなければ必要のない治療を施すことになりかねない。

ギャングのような迫力

う見える。

それに対してがん細胞は大きさがふぞろいだ。

輪郭がゆがんでいてゴツゴツしている。細胞の核の中心がまるくて赤くなり、まるでギョロツとした目つきでにらんでいるようだ。がん細胞は人に悪さをするが、やはり顔つきもギャングのような悪人顔だ。座頭市かゴルゴ13のような迫力だ。



病理医の診断が1人の患者の治療法に、ひいては人生に影響する。科学が進んだ現在でも、病理診断ができるコンピューターや画像処理システムは存在しない。人間の目による判断が機械に勝る分野である。責任は重い、やりがいも大きい。

現在道内では約110人の病理専門医が日夜、がん細胞の診断に力を注いでいる。

（北大医学部腫瘍病理学教授）